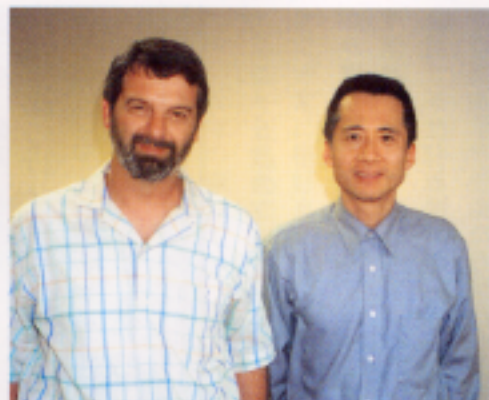




アメリカではボランティア活動を基礎にした学習を、サービズ・ラーニングと呼んでいる。大学でもさかんで、正規の授業科目とし



て置かれていることが多い。わたくしが在外研究で留学したプロビデンス大学（ロードアイランド州）では、週に計三時間ほど、小・中学生の学習支援などをキャンパス近隣の地域で行なう。教室



での授業は討論を中心に五〇分を週に三回、一回が四週続く。ま

た、正規の授業科目の基本原則として、かなりの量の文献を読む。授業（入門レベル）で印象深かったのは、まず、ボランティアの批判的な検討をテーマの一つとしていたことである。ある日の授業では「ボランティア活動は社会問題の解決を阻害する」と主張する文献をとりあげ、学生自身の活動に関連づけて討論していた。つぎに、授業で使用される文献が選ばれる資料集である（編集者の一人が写真のリチャード・パティストーニ教授で、プログラム責任者）。これは、ボランティア、コミュニティ、民主的市民の資質をめぐる基本的問題に関する文献を広範な分野から集めたもので、短編小説も含まれている。ボランティア・ガイドブックとは異なるこの種の資料集が、授業の充実に必要であると思った。



一九九九年九月一日から十ヵ月間、アメリカ合衆国スタンフォード大学と国立バークレー研究所で文部省在外研究員として、放射光を用いた固体物性物理の研究を行い、またいろいろな人々と交流を深めてきました。

もっとも印象深かったのは、国立バークレー研究所のあるカリフォルニア州バークレー市で、写真は、奈良の若草山のような高さの山の頂上にある研究所の



食堂からとったものです。手前の建物群は、カリフォルニア大学バークレー校、そして次にバークレー市内、湾を隔てて、右が芸術家が集まるサウスリート、左がサンフランシスコ市です。

写真中央の海から一キロのところに、実験のために借りたアパートがありました。夜通し実験を行うこともありますが、たいいては、朝七時半頃にアパートを出て、研究所に向かいます。その途中で、必ずといっていいほど、中学生からお年寄りまでのいろいろな人が、挨拶や時間、道を聞くためなどで気軽に話かけてくるのに驚かされました。きちんと返事をしないと、説教をされたり、次のバス停はと聞かれたので、アサートンと言ったら、発音がおかしいと、その場で発音練習がはじまったりしました。スタンフォードとは違った好印象を受けました。ただ、奈良という地名を知っている人がひとりもいなかったことは、とても悲しく、残念でした。ヒッピーの発祥の地でもあり、学生をはじめとした人々の活気が感じられる街でした。